すみだ地域学情報 We!

第69号
2025年
（令和７年）
９月発行

発行：墨田区（地域活動推進課）
〒130-8640　墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202　FAX 03-5608-6934　✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

ひと、つながる。墨田区

バックナンバーは こちらから

心ヲツナグ　世界ヲツナグ

知の宝庫

郵政博物館は「心ヲツナグ 世界ヲツナグ」をコンセプトに、郵便や通信の歴史と文化を楽しく学ぶ博物館です。郵便にまつわる歴史やテーマを6つの世界に分け、国内外の郵便に関する資料約４００点や33万種もの切手を展示する常設展示場、年４～５回の資料展やイベントを開催する企画展示場と多目的スペースがあります。

郵政博物館は１９０２年（明治35）、万国郵便連合（ＵＰＵ）加盟25周年の記念事業として「郵便博物館」という名称で創設されました。大手町に「逓信総合博物館」で開館していた時に行ったことがある人もいらっしゃるでしょうか？

逓信総合博物館は大手町の再開発に伴い２０１３年（平成25）８月31日に閉館。閉館は、日本郵政、ＮＴＴ東日本、ＮＨＫの三社の間で決定、それぞれが継続先を模索しました。

郵政博物館は２０１４年（平成26）３月１日、東京スカイツリータウン・ソラマチ９階に開館しました。収蔵資料が多かったこともあり、なかなか場所が見つかりませんでしたが東京ソラマチ®に無事に開館しました。

地域文化の新たな挑戦

すみだ企業博物館連携協議会という会があります。これは２０１６年に、花王ミュージアム、たばこと塩の博物館、東武博物館、セイコーミュージアムと郵政博物館の企業博物館で結成しました。参加博物館間の親睦及び各館における人材の育成、資質の向上を図りながら、各館が連携することにより、博物館に対する理解の向上を目指すとともに、地元地域の文化振興と活性化に貢献することを目的としています。

活動の一部を紹介すると…

２０１９年、スタンプラリー開催。コンプリートでオリジナルトートバックをプレゼント。

２０２２年８月にセイコーミュージアムが銀座に移転、「セイコーミュージアム　銀座」として開館、墨田区から離れたことにより立ち位置はオブザーバーになりました。

２０２５年、たばこと塩の博物館が特別展「日常をつくる！企業博物館からみた昭和30年代」を開催、共同監修しました。この展覧会はまさに、すみだ企業博物館連携協議会の活動の集大成でした。その年、紅ミュージアムがオブザーバーとして加わりました。

すみだ企業博物館連携協議会はこれからも墨田区地域の文化振興と活性化に貢献します。

貯金文化の変遷を辿る

２０２５年は郵便貯金が創業されて１５０年です。郵政博物館では企画展「『ゆうちょ』１５０年～はじまりからアプリまで～」を開催しました。

郵便が開業した１８７１年（明治４）は、江戸時代の幕府正貨、藩札、明治政府の太政官札といった、多種多様なお金が入り乱れてとても不便でした。「郵便の父」といわれる前島密が発注した新しい紙幣によって、古いお金は徐々に新しい通貨の「円」、「銭」に置き換えられ、１８７５年（明治８）には郵便貯金が始まりました。

この展示では、前島が所属していた政府「改正掛」の果たした役割や前島のロンドンでの生活を振り返りつつ、預金、貯金の習慣がなかった時代の開業の苦心を紹介、展示するとともに、様々な業務変革を経て、民営化で誕生した「ゆうちょ銀行」の新しい取り組みを紹介しました。

郵政博物館が墨田区に来て12年目。もう十分、縁ができたと言っていいのではないでしょうか。これからもさまざまな企画展、イベントを予定していきます。末永くご愛顧ください。

（郵政博物館学芸員　冨永紀子）

人間国宝を生んだ「落語のまちすみだ」とその歴史

人間国宝の五街道雲助師匠

人間国宝誕生 すみだの誇り

墨田区で生まれ育った落語家の五街道雲助師匠が、一昨年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、昨年、墨田区の名誉区民になりました。落語家としての人間国宝は4人目で、墨田区にとって大変名誉なことです。雲助師匠の人間国宝誕生によって伝統文化の一つである落語に注目が集まっていますが、実は歴史を紐解くと、「落語のまちすみだ」という言葉が当てはまるのです。江戸落語の始祖は、1680年代の貞享年間から元禄にかけて、辻噺を得意とした鹿野武左ヱ門でしたが、奉行所の咎めを受けて伊豆大島に流され、その死後は江戸落語が途絶えかかるのです。そして、その約100年後の天明4（1784）年に、今の秋葉神社近くにあった武蔵屋という料理屋で、狂歌師で戯作者だった烏亭焉馬が噺の会を開いたのが近代落語の始まりといわれています。この時のチラシを書いたのが太田南畝で、狂歌師100人ほどが集まる会だったそうです。こうした会を重ねるにつれ、一般人も加わるようになり、噺家という職業が成り立っていき江戸落語が隆盛を極めていくのです。焉馬の死後、数多くの落語の名人が生まれますが、その一人、怪談噺の元祖と称された初代林家正蔵は、本所林町（現立川1・2丁目）に住むなど、多くの噺家がすみだから生まれています。

江戸落語 すみだに花開く

墨田区に住んだ歴史に残る名人落語家を2人紹介します。明治の巨匠といわれた三遊亭圓朝は、「真景累ケ淵」「牡丹灯籠」「文七元結」「芝浜」「心眼」など多くの古典落語の名作を残しました。その圓朝が、明治9（1876）年秋から20（1887）年までの約10年間、本所南割下水通り南二葉町23番（現亀沢2-12）に旗本屋敷跡約1,700㎡を購入し、南割下水から水を引いて池を造り、羅漢堂という庵なども造って住んだのです。「塩原太助一代記」はここで太助のことを知り、調べて作った噺です。また、圓朝は、明治22（1889）年に、初代圓生の追善供養と、三遊派落語の発展祈願として、木母寺境内に「三遊塚」を建立します。立派な石碑の表の書は山岡鉄舟、裏は高橋泥舟によるものです。もう一人は、昭和の名人、古今亭志ん生です。主な演目は「火焔太鼓」「唐茄子屋政談」「品川心中」「三枚起請」「お直し」「らくだ」「子別れ」など豊富ですが、落語家人生の前半は貧乏の連続で志ん生を名乗るまで16回改名するなどその破天荒な人生が芸を成したともいわれます。その志ん生は、昭和3（1928）年から11（1936）年までの約9年間、業平の今の本所税務署の裏あたりの長屋に住みました。そこでは、極貧の生活に加え、蚊やなめくじが多く出たことから「なめくじ長屋」と呼ばれていたそうです。

木母寺境内に建つ三遊塚

名人たちが愛したまち

また、落語の舞台となった場所も墨田区に数多くあります。「文七元結」に出てくる本所達磨横丁は今の東駒形1丁目にありました。「中村仲蔵」が願をかけに行くのは柳島妙見の法性寺です。向島に住んだ春風亭柳好が得意とした「野ざらし」の舞台は言問団子あたりの隅田川岸です。昔のすみだの風景を想像しながら落語を聴くのもいいですね。

（元墨田区副区長　髙野　祐次）

亀沢第一児童遊園内に建つ三遊亭圓朝住居跡説明板